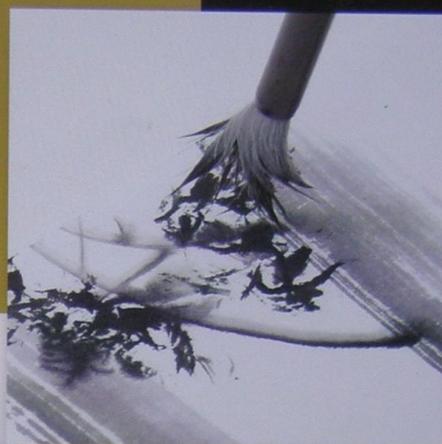


根岸 嘉一郎



# 墨の美に学ぶ 水墨画

基礎から創作まで



日貿出版社

墨の美に学ぶ  
水墨画

基礎から創作まで

根岸嘉一郎

日貿出版社

## はじめに

「水墨画とは何か」。この言葉は、若い頃、思うように描けずに悩んでいた私にとって大きな課題でしたが、坂崎二郎の『絵とは何か』に出会い、自分なりに解くことができました。この本を読んで本当によかったと思いました。それまでは技法にこだわり、花鳥、山水的な様式に縛られて、先人達との比較ばかりに気を使って落胆していたことが嘘のように晴れていったことを思い出します。絵は一言でいえば、感覚である。大切なのは、想像力と個性である、ということが大筋だったと思います。要するに、水墨画も他の日本画や西洋画と同じで、ただ素材が伝統的な毛筆と墨・紙というだけのことであると考えようにしたのです。丁度その頃から、今の現代水墨画が流行り出しましたので大いに制作意欲が湧き前向きになれました。私のWALLシリーズは、そんな中で生まれました。何を描いたらいいか、壁に突き当たったんだから、壁を描いちゃおうという訳で、開き直って和紙にアクリル絵の具を實際に鍍くわを使って塗り込んだのが第一作目ですが、結構大きな反響がありました。描きたいものを描きたいように描いたのが実情ですが、それまでに修練して得た基礎があったのが良かったのだと、今思い起こしています。

私が制作上最も大切にしていることは「墨色」にこだ

わることです。つまり最も美しい墨の発色のことです。もともと絵画全般に共通している「基礎」の多くは素材の持っている美しい発色に起因しているといえます。単なる白黒画ではなく、墨でなくてはならない要素、「なぜ墨で描くのか」という設問の答えの一つがそこにあるからです。本書では、美しい墨の発色について私なりに習得した技法を解説しました。

また、絵を描く上で最も難しいと思われる「創作」という問題にも取り組んでいます。池田満寿夫の著書『模倣と創造』の中からヒントを得て私なりに形にした方法です。何も無い陸の孤島では何も生まれません。真似ることにはほんの少しだけ自分なりの創造を加えることを繰り返すうちに本当はこんな絵を描きたかったのだという構図に出会えるかも知れないのです。決して真似を奨励することではありません。現代は写真やコピーが簡単に手に入る世の中ですが、それらを真似て描いても本当の喜びにはならないことは明らかですから。

本書は多くの皆様が悩んでおられることに少しでもお手伝いできればとの思いで取り組みました。墨の本質を忘れず、現代の感覚を意識して、自分なりの世界の中で自由に羽ばたけたら、水墨画を描く本当の喜びが手に入ることを心より信じています。

# 1章 用具と調墨

はじめに

作品例1

- 「寒」
- 「神気凛々森の鎮守」
- 「上高地」
- 「農」
- 「畦道」
- 「渓谷秋景」
- 「流れ」
- 「寒い朝」

墨の美を極める……「先濃後淡」による表現方法

用具の準備 美しい墨色の一步

墨の磨り方

三墨法を作る

側筆・半側筆・直筆

参考作例「雨後の参道」

《描法1》 シクラメン 「先濃後淡」の基本……遠近感の表現

絵画の魅力とは

# 2章 描法の実際

《描法2》 杉木立 「先濃後淡」での描き方……複数のテクニク

刷毛の準備／幹から枝を描く／手前の葉を描く／奥の葉を描く／背景を描く  
草むらを描く／背景をまとめる／刷毛による淡墨仕上げ

作画の手順

樹木の基本描法

参考作例1「尾瀬の木道」

参考作例2「薰風そよぐ棚田」

《描法3》 噴煙 「筋目を生かす」描き方

《描法4》 渓谷 「刷毛」を使った描き方

作画の手順

《描法5》 雲海 「刷毛と筆」を使った描き方

参考作例「黄山」

《描法6》 山岳 「にじみとかすれ」の表現

《描法7》 雪山 「刷毛」を使った描き方

参考作例「吹雪」

《描法8》 ブナ林 「ドーサとスタンピング」を使った描き方

作画の手順

《描法9》 濤声 「ドーサ」を使って「吹く」

《描法10》 怒濤 「ドーサ」を使って「たたく」

ドーサ(礮水)について

《描法11》 幽玄 「膠」の活用法

作画の手順

《描法12》 収穫 「ドーサ」を使った描き方

作画の手順

参考作例「清流」

《描法13》 月と星 「ドーサと膠」を使って描く

作画の手順

参考作例1「十五夜シアター」

参考作例2「天の川をいたたく森」

作品例II

「炎」

「WALL・鳩」

「WALL・アンコールワット」

構図について

参考作例1「山荘」

参考作例2「浴室」



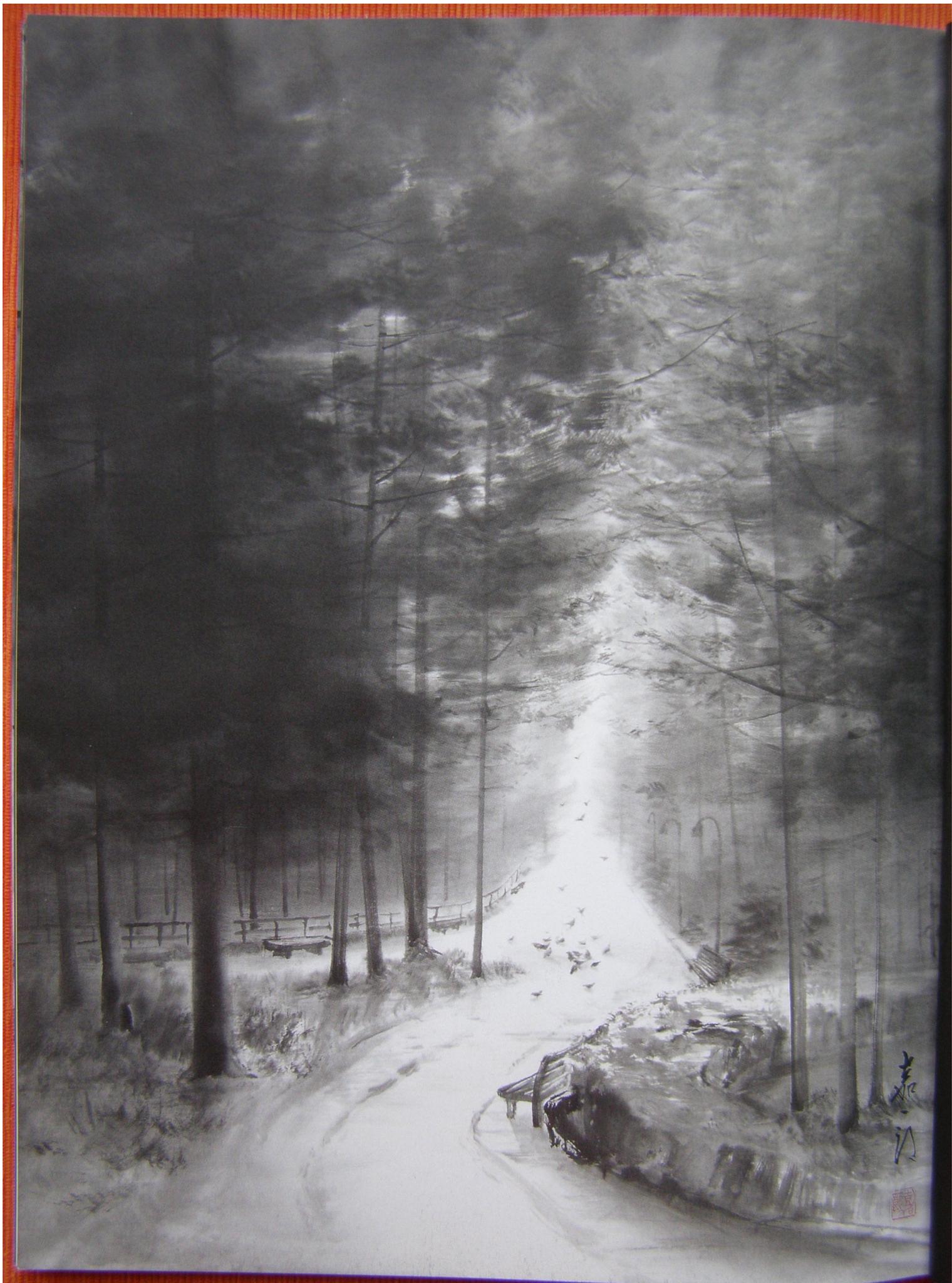
「寒」(53.0×72.7cm)



「神気漂う森の鎮守」(48.3×40.0cm)



「上高地」(53.0×72.7cm)







「溪谷秋景」(ドーサ、スタンピング / 48.3×37.8cm)





## 墨の美を極める…「先濃後淡」による表現方法

美しい墨色を生み出す第一のコツは「先濃後淡」です。これは、濃いところから筆を入れ、薄い墨を重ねていく方法です。これに対して、最初は淡く、徐々に墨を重ねながら濃くする「先淡後濃」の方法は、失敗は少ないので多く採られている方法ですが、墨の粒子が積み重なると発色が鈍くなるという欠点があります。

### 調墨の二要素

【1】墨の含ませ方……三墨法による美しい濃淡の表現。および水の加減と筆の整え方。

【2】作画の手順……①濃い部分から描く（「先濃後淡」の原則）。

②手前から描く（二筆目は一筆目の後ろになるという原理を用いる）。また生紙と膠の関係より生まれる「筋目」の特徴も描法に生かしたい。

【3】リズムで連筆……遅・渋・峻・疾の筆勢が生まれ、筆跡がまとまる。また、樹木や葉なども基本技法をリズムで覚えると早く身につけ応用が利くようになります。

つまり「墨の美」とは、先濃後淡の原則からできるだけ重ね描きを少なくして描いていくことです。そして、調墨の三要素を踏まえつつ、物の外観にあまりこだわらず、墨色と筆勢を大切にして思い切ったリズムミカルに描くことにつきるのです。

これから解説していく具体的な描法でも、以上のポイントを念頭に置いて取り組んでください。

# 1章 用具と調墨

水墨画は筆・墨・硯・紙など、用具の特性を生かしてこそ他の絵画とは異なる描法の魅力、表現の可能性が生まれます。本章では、まず基本となる用具の準備から扱い方、すべての描法の基本となる「三墨法」の調墨のポイント、側筆・半側筆・直筆という用筆の方法、そして「先濃後淡」という基本原理を解説していきます。

# 用具の準備

## 美しい墨色の二歩

### 用具の種類

水墨画の基本的な用具は、筆・墨・硯・紙の「文房四宝」と呼ばれるものですが、どのようなものを選ぶかは画家それぞれの工夫があります。ここでは、その種類と特徴をみていきましょう。

### 筆

筆の種類は大変に多く、形の上からは大から中・小、長鋒（穂先の長い筆）、短鋒（穂先の短い筆）に分類でき、毛の性質から大きく軟筆、硬筆に分けられます。そして、軟筆の代表が羊毛であり、水を含みが良く広い面を描いたり「ぼかし」にも効果的です。それに対して硬筆の代表にはイタチの毛があり、主に線描に適しています。本書でも羊毛とイタチを使い分けています。また刷毛もテーマによって用いています。

### 墨

ご存知のように墨には油煙墨と松煙墨があります。油煙墨は墨の色に茶色味があり、山水面の描法に多く用いられ、一方の松煙墨は青味がかって比較的淡い表現に適し

### 硯

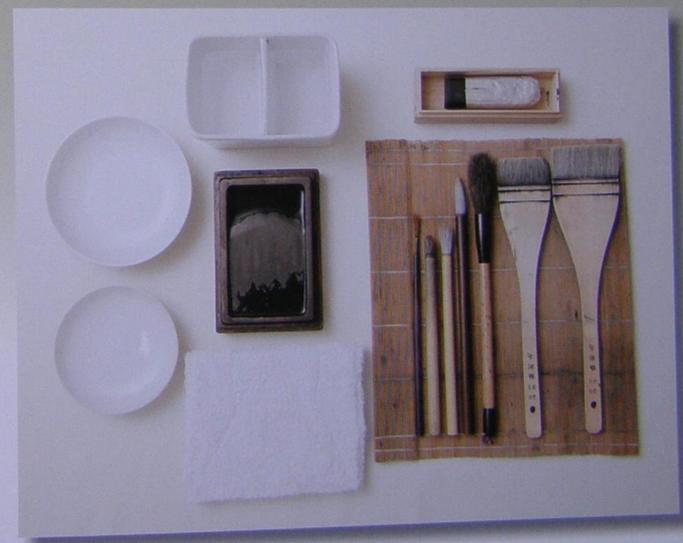
中国製、日本製と各種ありますが、良い硯は素地が緻密で墨のおりやすいことがポイントです。極端に高価なものを選ぶ必要はありませんが、頻繁に取り替えるものではありませので、右記の要件を備えた品質の高い物を選びましょう。

### 紙

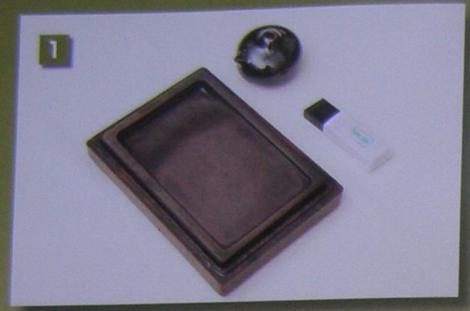
紙も水墨画の特徴ある材料です。宣紙、麻紙が一般的ですが、特別に漉いた紙を用いて新しい表現に挑戦してみることが大切です。特に私が愛用している紙は「神郷紙」です。楮100パーセントの越前和紙で、表面の目がつまっていて厚みがあり、麻紙よりも墨色がきれいにでて墨の特徴を引き立てる紙です。

### 用具の配置

実際の教室でも使っている用具の配置です。刷毛や筆はこの程度の数でも充分ですが、絵皿は描く作品によって調節しましょう。また筆洗はこまめに洗って、きれいな水を常時用意しておきます。



### 墨の磨り方



1 硯は上の方を高くして磨ることがポイントです。



2 まず、硯に水滴から水をとり、一度に多くの水を垂らすのではなく、数滴ずつ垂らしながら磨ります。



3 墨は硯に対して垂直に、円く回しながら磨ります。そして、磨った墨が又ルヌルしてきたら（これが濃墨です）、硯の海の方へ押し溜めます。



4 これを繰り返して必要な濃墨を用意します。

# 三墨法を作る

三墨法は、本書で解説するすべての描法の基本となるものです。十分に練習して、つねに自由に筆が動くようにしておきましょう。まず三墨法の調墨に入る前に、濃墨と淡墨を用意します。

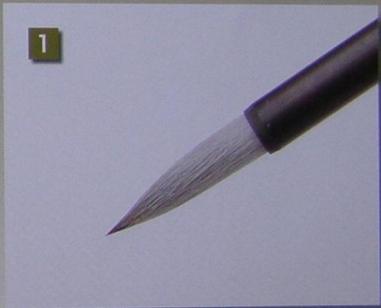
## 三墨法の作り方①



これを絵皿の土手につけておきます。この時、磨った墨の濃度を確認します。



次にもう一枚の絵皿を用意して、この濃墨に水を加えて調節し淡墨をつくります。



筆先は整えておきます。



筆に硯から濃墨をとりまします。



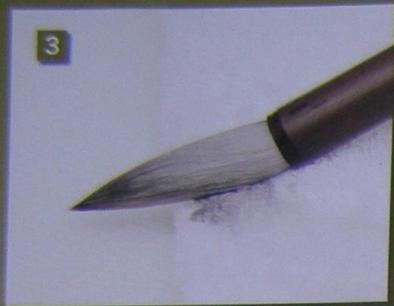
この時、十分に墨を混ぜてその濃さを調節します。淡墨の淡さの程度は絵皿の縁の色合いで確認できます。



濃墨と淡墨の準備ができました。この配置が常に頭の中に入っているようにすることで、自然に手が動くようになります。

## 三墨法の作り方②

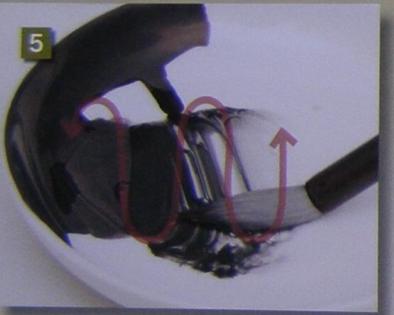
ここでは、筆を三墨法の状態、つまり筆の根元から水・淡墨・中墨・濃墨の状態にするプロセスを解説しましょう。ただし実際に描く時は、描く対象により筆の角度や動かし方に変化が出ますので、三墨法といっても様々なバリエーションが必要となります。ここではあくまでも基本となる手順を紹介しました。



次に筆の根元の余分な水分を布などで拭いておきます。



筆先に硯から濃墨をとりまします。



濃墨の入った絵皿で筆を左右に振りながら、上下にスライドさせて墨を馴染ませます。



筆の根元から、水・淡墨・中墨・濃墨の状態になりました。

まず、筆は筆洗のきれいな水でよく洗います。



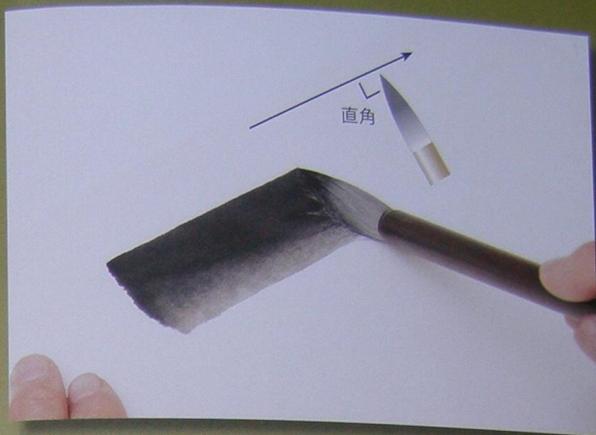
ここに淡墨を筆の半分ほどに含ませます。



# 側筆・半側筆・直筆

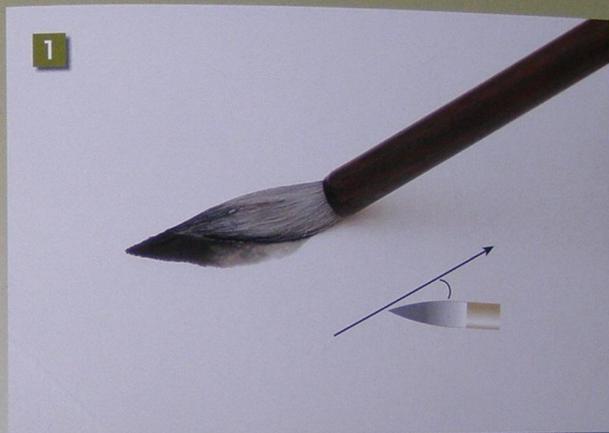
次に三墨法を生かした描法の基本として、側筆・半側筆・直筆を考えてみます。

側筆



まず一般的な側筆は、写真のように三墨法の筆を寝かせて進行方向に直角に運筆する方法です。筆先が濃く、筆の根元が淡く表現できます。

半側筆



側筆よりもやや筆を進行方向に対して斜めに寝かせて描くと、側筆よりも幅の狭い濃墨から淡墨のグラデーションが描けます。



直筆

筆を紙面に対して垂直に立てて描く直筆でも、三墨法が基本になります。筆先への濃墨のとり方、筆の角度、また三墨の状態にさらに水を含ませるなど手法を変えることによって、表現の変化が楽しめます。(22・23頁参照)。

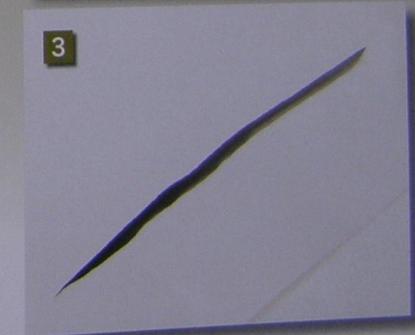
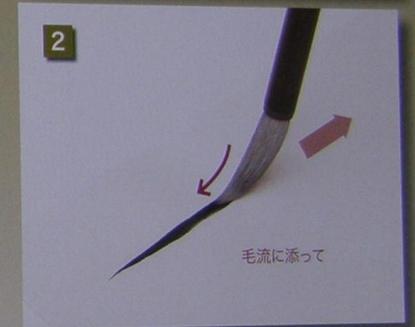
太い樹木は「側筆」、中くらいの太さの樹木は「半側筆」、細い樹木や山門の線は「直筆」で描きました。



参考作例「雨後の参道」(40.8×48.4cm)

直筆①

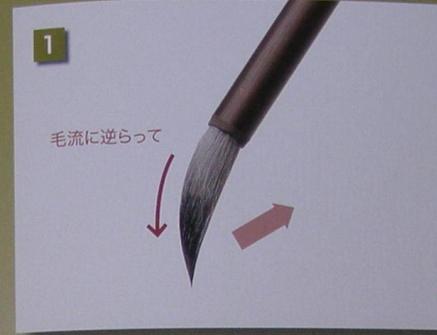
筆先の片面に墨をつけ、毛流に添って描くと抑揚のある細い線となり、最初は濃く、次第に淡い線が表現できます。



毛流に添って描く

直筆②

毛流に逆らって運筆すると、穂の先端に腰ができ、メリハリのある同じ太さの線となり、一本の線の中に濃淡の変化が出ます。



毛流に逆らって描く

直筆③

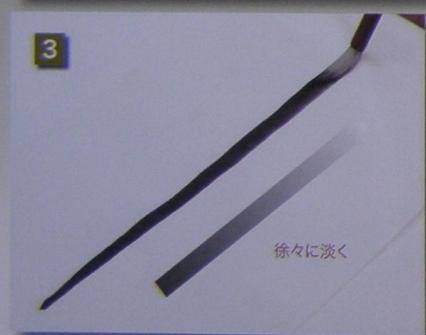
筆を三墨法にして筆先に水を含ませて描くと、最初は淡く、次第に濃い線が表現できます。



三墨法+水

直筆④

筆を三墨法にして筆先に濃墨をつけて描くと、最初は濃く、次第に淡い線が表現できます。



三墨法+濃墨

# シクラメン

## 「先濃後淡」の基本……遠近感の表現

先濃後淡の原理（後から描いたものが後ろにいく）と三墨法でシクラメンを描いてみましょう。ポイントは、途中で墨を継がずに一回の調墨ですべてを描くということです。これによって遠近感が表現できます。



1

「1」手前の中央の花弁を下から上に描きます。花弁の元が濃く、先の部分が淡く表現できます。

「2・3」次に右、左と花びらを描いていきます。



2



3



4

「4」奥の花弁を描いて一つの花の完成です。



5

「5」さらに、左側、右奥の花を描きます。一回の調墨で三つの花を描くことにより自然に淡く表現できます。

ポイント

後から描いた花は後ろ側になり、遠近感が出ます。



6

「6」茎を描いて完成です。



## 絵画の魅力とは

日頃考えている、水墨画を含めた絵画の魅力を箇条書きにしました。  
私も常に座右に置いて創作に取り組んでいます。

- 〔1〕基本構成と統一感……………構図がしっかりしているか。  
異なった表現方法が混在していないか。  
目的意識がはっきりしているか。
- 〔2〕突き詰めた表現……………一般目線でない一歩踏み込んだ表現ができているか。  
(強調と省略)
- 〔3〕訴求力はあるか……………技術やテクニックよりも精神に影響を及ぼす要素があるか。(見る者に訴えるもの)
- 〔4〕象徴性……………具体的なものと抽象的なものの結びつき。
- 〔5〕実在感……………対象のリアリティーや存在感があるか。
- 〔6〕バランス……………色々な対比(アンバランスの美)。  
リズムやムーブメントが感じられるか。  
光と影。陰陽は表現されているか。  
既成概念にとらわれていないか。  
広がりや奥行きがあるか。  
詩情が感じられるか。  
緊張感があるか。  
輝きがあるか。  
硬さはないか。
- 〔7〕その他……………

「芸術は我々自身の器用さや教養や知識よりも偉大な何かである」(ゴッホの手紙より)

## 2章 描法の実際

本章では、1章で解説した調墨や運筆の基本、および「先濃後淡」の手法を実際に用いた描法を解説していきます。また、本章から3章にかけて、主な描法の最後に、作画の手順を付しておきましたが、様々な技法の積み重ねによって、作品ができ上がっていることがお分かりいただけるでしょう。

# 杉木立

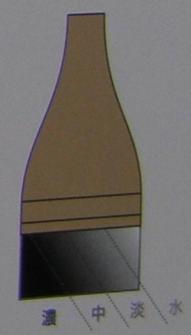
## 「先濃後淡」での描き方…複数のテクニク

ここでは、杉の幹を刷毛で描き、筆で細部を表現しました。

### 【刷毛の準備】



「1~4」刷毛を水でよく洗い、全体に淡墨を含ませてから片側に濃墨をつけ、絵皿でよく調節します。



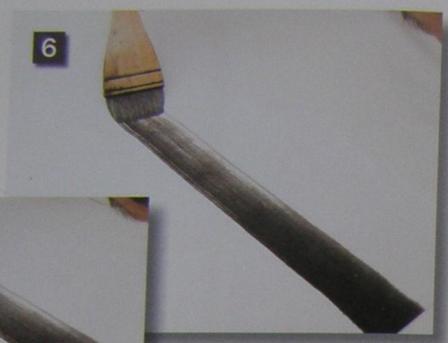
「5」刷毛を真っ直ぐに描くコツは、腕だけで描くのではなく、リズムをつけて引張るように描くことです。

### 【幹から枝を描く】

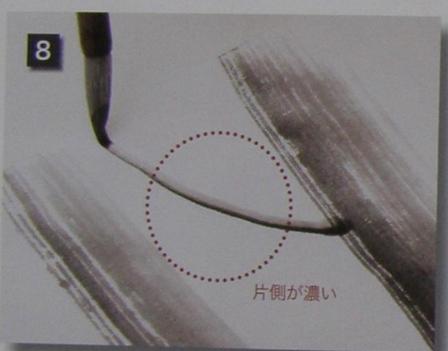
「6」杉の幹を刷毛を用いて前述の要領で2本描きます。まず1本目は一番手前の幹なので、かすれ過ぎないように注意して描きます。

### ポイント

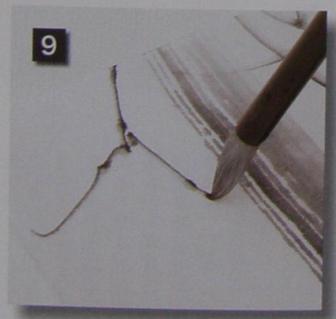
枝は、筆先の片側に濃墨をとって描きます。



「7」2本目の幹は根から上に向けて向かって少しかすれ気味に描きます。



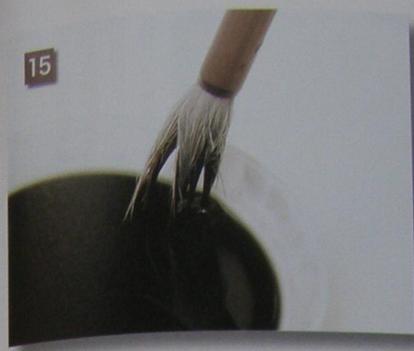
「8」幹から出る枝は、硯面から筆の片側に濃墨をとり、線の片側を濃くなるように表現します。



「9・10」直筆で筆先を利かせて小枝を描きます。



【手前の葉を描く】 筆を割って打つ



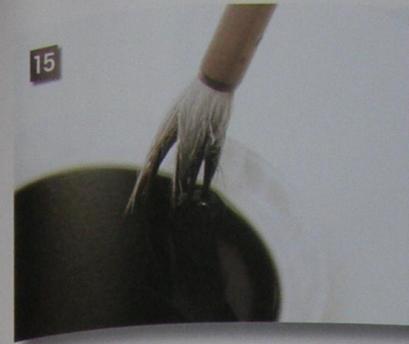
「11〜17」葉は筆先を割って描いていきます。三墨法に整えた筆を絵皿の中で割って、同じパターンが出ないように筆を回しながら、また途中で淡墨を含ませながら打っていきます。「14」が筆先が紙に当たった状態です。

【奥の葉を描く】 マスキングの効果



「18〜21」幹の奥にある葉は、幹のかすれた部分にかからないように幹の部分に紙を当て、マスキングをした状態で筆で打つようにします。「21」のように自然な感じに表現できます。

【手前の葉を描く】 筆を割って打つ



「11～17」葉は筆先を割って描いていきます。三墨法に整えた筆を絵皿の中で割って、同じパターンが出ないように筆を回しながら、また途中で淡墨を含ませながら打っていきます。「14」が筆先が紙に当たった状態です。

【奥の葉を描く】 マスキングの効果



「18～21」幹の奥にある葉は、幹のかすれた部分にかからないように幹の部分に紙を当て、マスキングをした状態で筆で打つようにします。「21」のように自然な感じに表現できます。

【背景を描く】奥行き感を出す



「22～25」の本目の幹を描いてから淡い葉を点描し、右奥にある細い4本目の幹は、片側に濃墨を合せ残した筆で描きます。ここにも、1章で解説した直筆が生きてきます。

【へ描きむら草】



「26・27」4本目の幹を描いてから下方の草むらぎ、三墨法の割り筆で点描します。ただし、濃い草むらの部分はマスキングをしてから描くようにします。



【背景を描く】奥行き感を出す



22



23



24



25

「22〜25」3本目の幹を描いてから淡い葉を点描し、右奥にある細い4本目の幹は、片側に濃墨を含ませた筆で描きます。ここにも、1章で解説した直筆が生きてきます。

【草むらじを描く】



26

「26・27」4本目の幹を描いてから下方の草むらじを、三墨法の割り筆で点描します。ただし、濃い草むらじの部分はマスキンをしてから描くことができます。



27

27





28



29



30

「28～30」左側の階段を描き入れてから完全に乾かします。次に霧を吹いて全体を濡らし、余分な水分は新聞紙でとっておきます。



31

「31」淡墨仕上げです。奥の方に淡い点描をほどこします。

【刷毛による淡墨仕上げ】



32

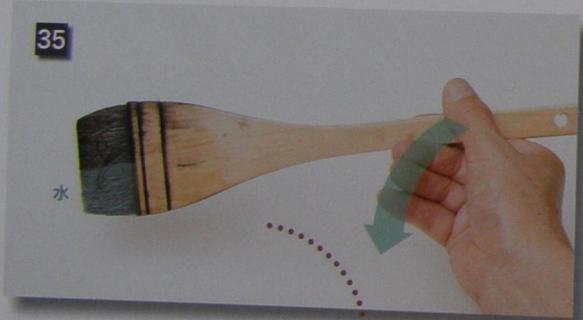


33



34

ポイント



35

水



36

水が落ちる

「32～36」刷毛によるほかしを入れます。まず絵皿に淡墨を半分ほど残り、刷毛の片側につけて調節します。次に、淡墨の反対側に水をつけほかしの状態にします。「36」では、この刷毛を裏返して、水の部分が上になるように向きを変えます。これにより完全な片ほかしの調墨が完成です。



完成

「三本杉」(40.0×27.0cm)

「37・38」葉の茂みや、奥の草むらなどのバックに、この刷毛でぼかしを入れて奥行きを表現します。



### 作画の手順

- ① 刷毛で中心となる2本の杉の幹を描く。
- ↓
- ② 筆先の片側に濃墨をとって枝を描く。  
(直筆のパリエーション)
- ↓
- ③ 筆を割って葉を描く。(筆の状態は三墨)
- ↓
- ④ 手前の幹にマスキングをして奥の葉を描く。
- ↓
- ⑤ 奥の二本の杉の幹を描く。(遠近感の表現)
- ↓
- ⑥ 草むらを描く。
- ↓
- ⑦ 全体を湿らせる。
- ↓
- ⑧ 筆と刷毛で淡墨仕上げ。



近景を濃く、中景、遠景と徐々に淡く表現します(先濃後淡)。

完成



「三本杉」(40.0×27.0cm)

## 樹木の基本描法

樹木の描法は、風景画を描く場合の大切な要素となるものであり、その生き生きとした表現は画面を引き立てます。ここでは、樹木の基本的な描法について、枝振りと葉の規則性を中心に解説していきます。

### 【1】基本は「三本の枝」から

①まず枝の描法の基本として、一本の線を節をつけながらリズムカルに引く練習をしてみましょう。この時、根元は太く、先にいくほど細くなるように描きます(A図)。  
②次にこの線で、鹿の角のように二本の枝を描きます(B図)。  
③その三本の枝に、さらにそれぞれ三本づつの枝を加えて完成です(C図)。

この枝が描ければ、葉のつけ方によって春、夏、秋、そして冬の樹木を描き分けることができるのです。

### 【2】冬の木、夏の木

冬の木立は、C図にわずかな葉を点描すれば表現できます(D図)、夏の木立は

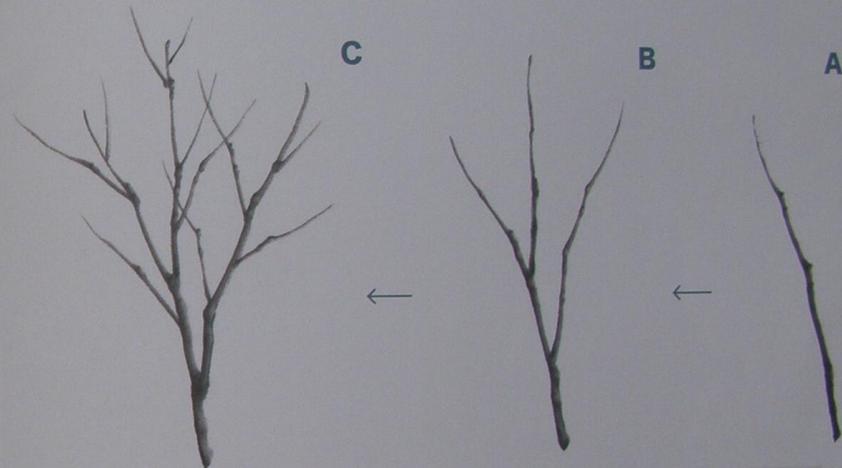
葉が枝の前面にあるところを想定して、枝を途切れ、途切れに描き入れて表現できます(E図)。  
ただし、葉は大、中、小の塊を意識して加えるようにします。

### 【3】針葉樹を描く

前項では、広葉樹などの基本的な描法を解説しましたが、ここでは私の作品にも多く登場する針葉樹について、その基本をみていきましょう。

①まず、幹と枝は手前の葉を描き込む部分を余白として残して描いていきましょう。左右に広がる独特な枝ぶりがポイントです(F図)。  
②次に、図の点線のように大まかな形を意識して、そのスペースの中で葉をつけていきます(G図)。

また、葉を先に描いてから幹と枝を加えていく方法もあります(H図)。



41頁・参考作例2 参照





参考作例1 「尾瀬の木道」 (33.0×40.3cm)

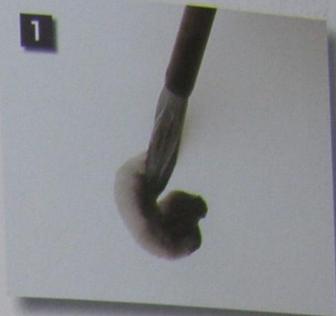


参考作例2 「薫風そよぐ棚田」 (48.2×40.0cm)

噴煙

「筋目を生かす」描き方

火山の噴煙を「筋目」の効果で表現します。三墨法に筆を整え、濃淡に変化をつけながらゆっくりとした運筆で煙を描きます。



ポイント

筆を三墨法にして、ゆっくりと描いていきます。運筆を遅らせることにより筆跡の周りに膠水がしみ出して筋目が出ます。



完成

「噴煙」(33.2x24.2cm)

完成



「噴煙」(33.2×24.2cm)

# 深谷

## 「刷毛」を使った描き方

刷毛を割った状態で深谷の岩肌や樹木を描き、次に刷毛を整えてから水面を描いていきます。刷毛ならではの面白い筆跡が生まれます。



「1」刷毛をよく洗い、全体に淡墨を含ませてから片側に濃墨をつけて調整し、刷毛の毛先を割っておきます。



「2〜4」その状態で、まず深谷の左手前の岩肌を描きます。



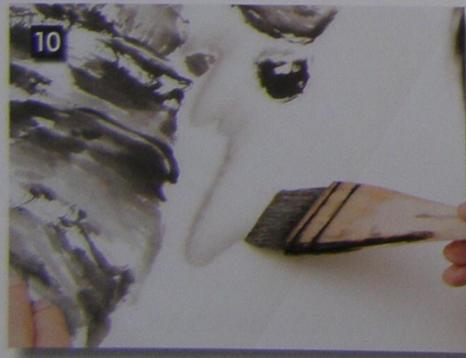
「7」全体に霧を吹きます。



「5・6」岩から顔をのぞかせている樹木は、水分を切った刷毛で、たたきつけるように表現します。この段階で全体を乾かします。



「8〜10」次に水面を描きます。刷毛の毛先は写真「8」のように整え、その毛先が水平になるように構え、リズミカルに動かして水の流れを表現します。描く前に、流れの動きに合わせて予備動作をしておくといでしょう。





「11・12」水の流れは、遠いところは鋭角的に、近いところは丸く描くと遠近感が表現できます。水面を描いてから岩の投影も描いておきます。



「13・14」細部を整え、岩肌の陰影も加えておきます。



「渓谷」(32.0×43.8cm)

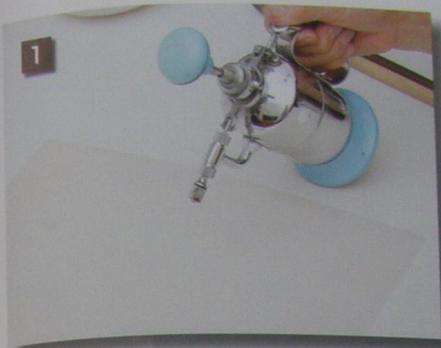
### 作画の手順

- ① 刷毛の先を絵皿の縁で割っておく。
- ↓
- ② この状態の刷毛で岩肌から描く。
- ↓
- ③ 岩肌から顔を出している樹木を描く。
- ↓
- ④ 全体に霧を吹いておく。
- ↓
- ⑤ 刷毛で水の流れを描く。
- ↓
- ⑥ 岩の投影を描く。
- ↓
- ⑦ 淡墨で細部を整える。



「刷毛と筆」を使った描き方

紙と墨を調整して、また刷毛と筆を用いてにじみと濃淡の変化で雲海を表現しました。  
ここでは手前に湧き上がる雲と、遠景に広がる雲を一つの画面に描きました。



1

「1・2」まず紙を濡らしてから、片はかしの刷毛で手前の湧き上がる雲の大体の形を描いておきます。



2



3



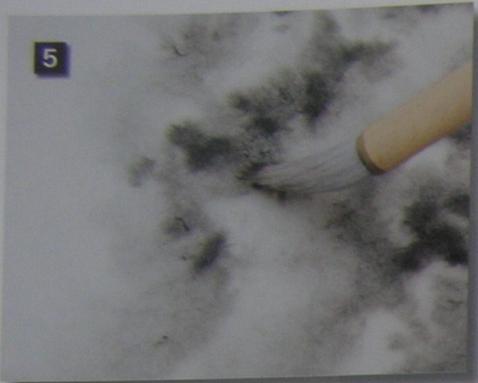
4

「3・4」筆に淡墨を含ませ、筆先をほぐして濃墨を足しながらランダムに点描していきます。この時、雲の塊の大きさを考えて、その対比を考慮して描くことが大切です。



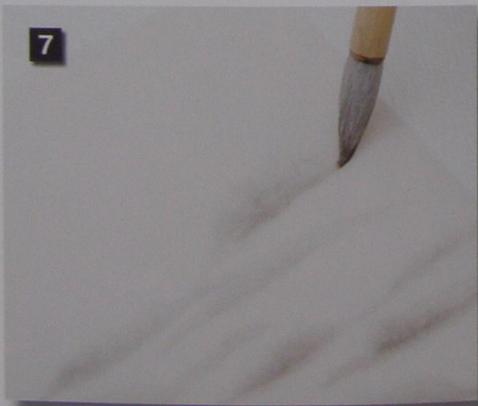
6

「5・6」紙が湿っている内に、打った点を同じパターン繰り返し描き返してはならないようにしてしなげながら、雲の形を描いていきます。



5

「7・8」雲海を描き終わる筆を水平に動かしてはなやかに仕上げます。



7



8

完成



「雲海」(330)



参考作例「黄山」(60.6×72.7cm)

山岳の描法として妙義山を描きました。ポイントはその山肌の表現と山裾のぼかし足です。自然に左右に濃淡の変化を出すようにします。

「3・4」乾かしてから霧を吹き、新聞紙で余分な水分はとっておきます。



1

「1」木成で山容のあたりを入れておきます。

「2」峰の片側を意識して、筆は三墨法で濃墨を筆先につけ、頂上付近から裾野に向けて筆を運びます。この時、穂先を割って、筆を浮かし加減にしておすれを出しながら描くようにします。



2



3



4

「5・6」全体が湿っているうちに山肌の調子を整え、筆の腹を使ってぼかし足を出していきます。これによって、余白との自然なつながりができます。



5



6

ぼかし足



完成

「雨後幻想」(62.8×48.3cm)

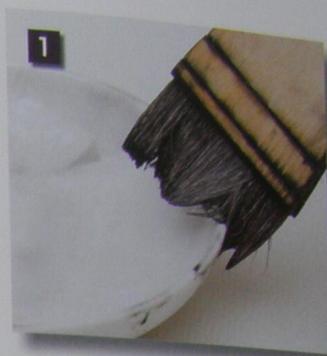
完成



「雨後幻想」(62.8×48.3cm)

「刷毛」を使った描き方

ここでは、刷毛を割って描くことで、全体を大・中・小の塊として表現して描くことがポイントになります。



「1〜3」刷毛を三墨に整え、毛先を割って中央の山を大、右側を中、左側を小という塊として描いていきます。



「4〜6」片ぼかして山の形と空を表現し、これを乾かします。



「7」霧を吹いて、余分な水分は新聞紙でとっておきます。



「8」ここでも、傾斜面に沿って淡墨でぼかし足を入れておきます。



完成

「雪山」(24.0×33.0cm)

### 3章 描法の展開

濃墨や淡墨の扱い方と筆や刷毛の基本的な運筆に慣れたら、ドーサや膠の効果を生かした表現を試みましょう。ただしドーサや膠は、あくまでもその性質を生かして描く、対象物の質感と必要性を考慮して使うことがポイントになります。意味もなく、またハランスを考えずに多用することは禁物です。大いに工夫してみてください。



参考作例「吹雪」(28.5×36.6cm)  
次章で解説しているドーサの効果を用いて表現しました。



参考作例「吹雪」(28.5×36.6cm)  
次章で解説しているドーサの効果を用いて表現しました。



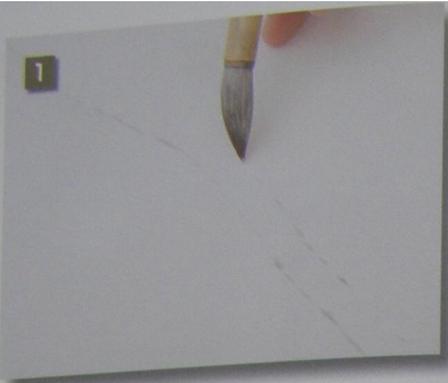
「ブナ林」(44.4×34.0cm) 次頁以降に具体的な描法を解説しました。

描法 8

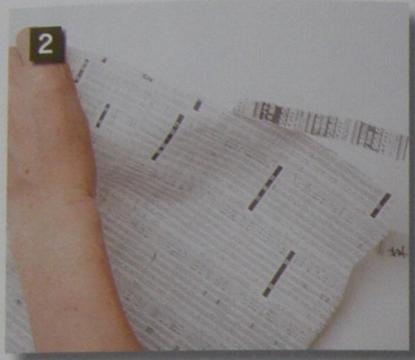
ブナ林

「ドーサとスタンピング」を使った描き方

ドーサ液とスタンピング(もの)に墨を塗り、それを紙に押しつけてものの形を写す方法を使った特殊技法です。この作例だけでなく、他のテーマにも応用できますので挑戦してみてください。



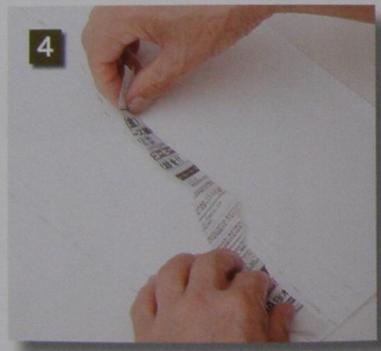
1 「1」[1] 用紙に墨を塗り、スタンピング(もの)を押しつけて墨の形を写す。



2 「2」[2] ちぎった新聞紙を、下絵に合わせて貼っていく。

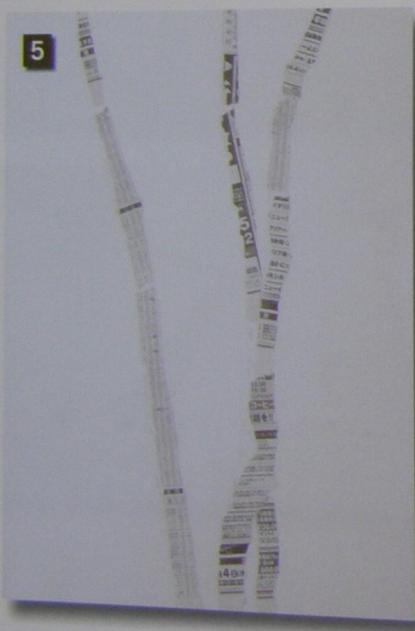


3 「3」[3] ちぎった新聞紙を、下絵に合わせて貼っていく。



4 「4・5」[4・5] ちぎった新聞紙を選び、下絵に合わせて貼っていく。

「4・5」[4・5] ちぎった新聞紙を選び、下絵に合わせて貼っていく。



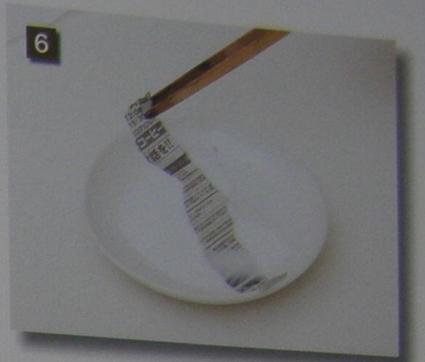
5 「5」[5] ちぎった新聞紙を選び、下絵に合わせて貼っていく。

「5」[5] ちぎった新聞紙を選び、下絵に合わせて貼っていく。

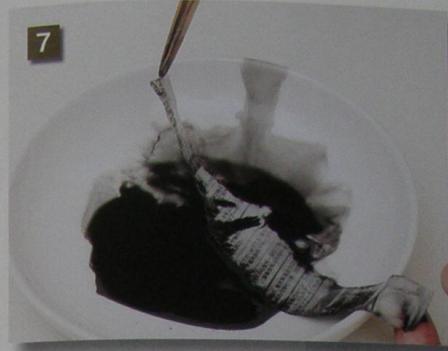
完成



「ブナ林」(44.4×34.0cm) 次頁以降に具体的な描法を解説しました。



6

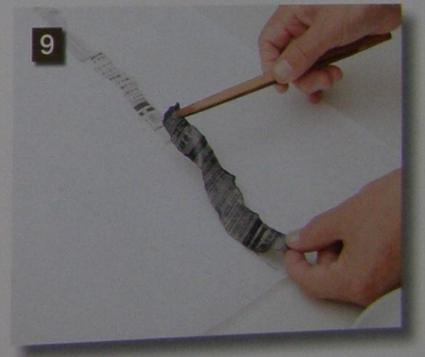


7



8

「6〜8」それぞれの新聞紙のピースを用紙からとって、ドーサ液につけてから墨を含ませます（濃淡の変化を出すために筆で描くようにします）。



9



10



11

「9〜12」その新聞紙を再び用紙に幹の形に合わせて置いて、上から強く押しはがしながら文様を用紙に写します（スタンピング）。



12



13

「13」三本の幹ができました。



「14」スタンピングの縦目や不自然なところを補筆して幹を完成させます。



表



裏

「15・16」枝を描いていきます。枝は筆の片側に硯から直接濃墨をとり、直筆で表現します。



「17・19」乾いてからこれを裏返します。幹の濃い部分に濃墨を置いていきます(裏描き)。



表

←

「20」再び表に戻します。裏描きにより、表に染み出した墨跡によって樹肌の質感が自然な感じに表現できます。



【28】背景の木立の湖面への投影を描く。



【21】乾いてから全体を湿らせます。



【22・23】水際のアタリをとり、背景の草むらや木立を淡墨で描きます。



【24】背景の影の部分も刷毛で表現します。刷毛は濡りに干拭かしの状態にしておきます。



【25】背景の部分が描けました。

### 作画の手順

- ① プナの幹を淡く描いておく。
- ↓
- ② プナの幹の形に合わせて新聞紙を切っておく。
- ↓
- ③ その新聞紙をドーサ液に浸し、次に濃墨と淡墨を含ませて用紙の上にスタンピングする。質感のあるプナの幹が表現できる。
- ↓
- ④ 幹の調子を整えてから枝を描き入れる。
- ↓
- ⑤ 裏から墨を加え、幹の質感に変化をつける。
- ↓ ↓
- ⑥ 表に返して、淡墨で背景を仕上げる。



① ② ③ ⑤

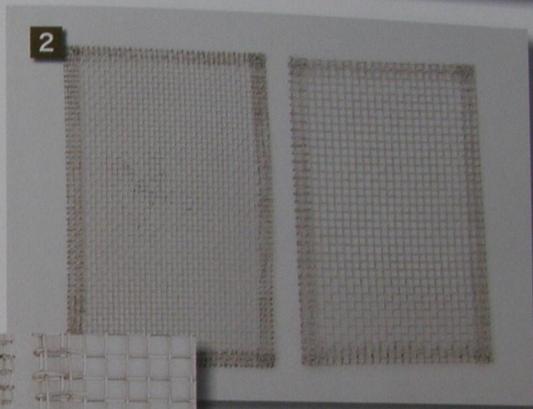
瀉声

「ドーサ」を使って「吹く」

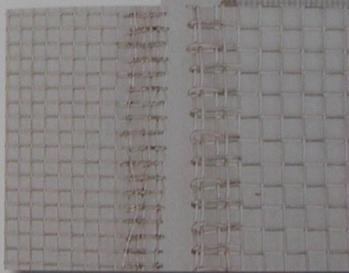
ドーサ液と金網を用いて岩に碎け散る波しぶきを表現します。  
「1」でも、用紙として神郷紙を用いました。



「1」三墨に調節した筆を割って、まず中心となる岩を描きます。



「2」金網を用意します。粗さは二通りですが、表現したい波しぶきの状態で使い分けるようにします。



「3」この金網にドーサ液を塗って、息を吹きかけてドーサ液を紙面に飛ばします。このような金網がない時は、毛の粗い山馬筆などにドーサ液を含ませて飛ばしてもよいでしょう。



「4」ドーサ液を吹きかけた用紙は充分に乾かしておきます。



「5」「6」用紙を裏返して、ドーサ液を飛ばした波を被った岩の部分に裏から濃墨をおいていくと、波しぶきが白く浮き出てきます。表に戻して調子を見ながら描いていきます。



「7」「8」筆の動きに変化をつけながら、波を描きます。



「瀉声」(28.6×36.0cm)

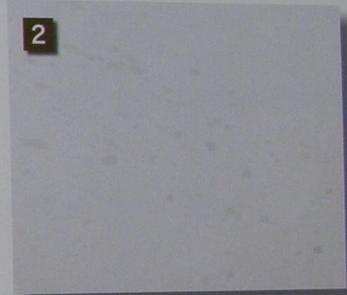
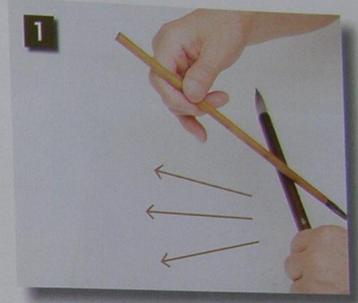


完成

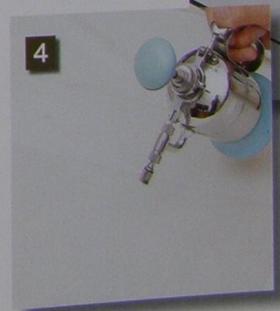
怒濤

「ドーサ」を使って「たたく」

前項同様、波を描きますが、ここでは写真のようにドーサ液をつけた筆をたたいてドーサ液を飛ばして上方に飛び散る波しぶきを表現しました。



「1・2」ドーサ液の飛沫に方向性が出るように斜めから飛ばします。



「3・4」完全に乾かしてから、全体を塗り付めます。



「5〜7」最初は大きめに波しぶきの形を白く残しながら墨を入れ、徐々に細部を描き込みます。

「8」割筆の先を使い、波頭を描くための「きっかけ」となる点を置いていきます。

「9・10」点と点をつなぎながら波頭を形つくりします。(48頁の「雲海」の描法を参照)



完成



「怒濤」(48.5×40.0cm)

## ドーサ(礬水)について

膠の薄い溶液に少量の明礬を溶かし合わせた液をドーサといいます。

水墨画におけるドーサの使い方は以下のものがあります。

水 200cc  
+  
膠 4~5g  
+  
生明礬 1~3g

最近市販のものを  
使う場合が多い

### 【1】生紙全体に塗布してにじみを抑える。

熟紙……横縦むらなくたっぷり引く。

(裏から一度、乾いたら表から二度)

半熟紙：薄いドーサを引いたもので、少しにじみを残す。

(二倍ぐらいに薄める)

### 【2】生紙の一部分に塗布し、白抜きとして利用する。

白樺など樹木を白く表現する。

雪の降る様子や積もった様子。

小さな星や月など白く光り輝いている表現。

飛び散る波濤や滝壺の飛沫。

岩や氷などの硬い質感の表現。

抽象表現の白く残したい部分。

ここでは、【2】の表現方法についての使い方や、注意すべき点を述べてみたいと思います。

① 樹木や草の葉などの場合は単に白く抜くだけでは単調で奥行きも出ませんので、ドーサ液を含ませた穂先の片面に墨をつけて描くことで、濃淡のある白抜きができます。(76頁参照)

② 雪などのように柔らかい質感を出したい場合は、薄めて使ったり、にじみを利用します。雪の降る状態によりドーサ液の飛ばし方を工夫します。(56頁参照)

③ 星や月のように白くはつきり出したい時は、いったん裏から墨を入れ、白く抜けた部分を避けながら表から再度墨を入れるようにします。(83頁参照)

④ 飛び散る波しぶきなどは、飛沫に方向性が出るよう吹きつける工夫が必要です。金網など利用すると便利です。(66頁参照)

⑤ 岩など硬い質感の表現にも使います。岩の状態や特徴をよく観察して、モミ紙や新聞紙等のスタンピングが良く使われますが、ドーサ液だけでなく墨も一緒に含ませて、濃淡を出すことです。また裏から墨を入れたり、塗り残しとの混在による複雑な質感を出すことが大切です。(60頁参照)

⑥ 最後に肝心なことは、白く抜いた部分が画面の中で飛び出していないかということです。ドーサ液を薄くしたり、墨を含ませたり、紙の白さと融合させたりして全体に馴染んでいるか、対象物の質感にあっているか確認することが重要です。

## 膠について

一般的に墨は、煤と膠でできていますが、その割合は煤10にして膠6が標準です。

膠は、紙に煤をしつかり定着させる接着剤の役割が最も大きいといえますが、他に煤の分散を良くし、美しいにじみと墨色に艶と独特の冴えを出す重要な働きがあります。しかし膠の成分は動物や魚類のタンパク質からできていますので取扱にも微妙です。磨墨をとり置きされる方が多いと思いますが、墨を磨いた直後から加水分解(酸化作用により炭酸ガスと水に変化)が始まり、徐々に粘度低下を起こしていきますので、時間と共に墨の発色は悪くなり表具で流れやすくなります。

また、タンパク質は雑菌に弱く腐敗して悪臭を出すようになると最悪です。これを「宿墨」といい冷蔵庫に入れることにより腐敗を遅らせることができますが、夏場は48時間、冬場は72時間を目安に使いきるようになるとよいでしょう。

以上、基礎知識として大切なことを書きましたが、本書では膠の効用を生かした描法を紹介しました。

### ①筋目描き

先の中淡墨で描いた線や面の筆跡周りに膠水がにじみ出し、後から重ねるように描いた筆跡は、膠水にはじかれるように白

い空白ができ、下に潜ったように見えます。(42頁参照)

### ②白抜き

先に膠で描いた白い部分の周りをの中淡墨で囲っても、膠水にはじかれて墨が入りづらくなり柔らかく抜けます。白抜きの輪郭を柔らかくしたい場合に適しています。もし周りから墨がにじみ込んでも、水を垂らすかティッシュ等で吸いとることができます(83頁参照)

### ③ぼかし

磨墨に少量の膠を加えることにより安定していた煤と膠との関係が崩れ、簡単に定着しなくなります。後から水を加え色々なぼかし効果を出すことができます。(73頁参照)

### ④際付き

少量の膠を加えた墨跡は筋目が出なくなり、輪郭が際付き現象が現れます。(下図参照)

※注意 ③、④では、墨が簡単に定着しなくなりますので、表具で流れ出す恐れがあります。時間を置いて枯らすか、フィキサチーフで止めることをお勧めします。



通常筆跡

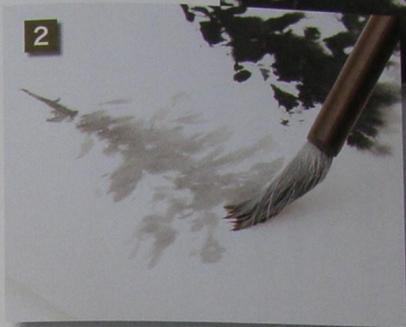


際付き

膠と水との効果を用いて、霧に煙る幽玄な世界を表現しました。また、筆先を割った「ひげ描き」で小枝を表現してみました。



「1」まず筆を三墨に調節して手前の樹木から描き始めます。



「2・3」濃淡の変化をつけて前後の関係を表現し、樹木の枝も描いていきます。



「4」筆を割り、割ったその筆先だけで枝を表現します。



5



6

「5・6」ここで、濃墨に膠を入れ筆に含ませます。この時、筆には膠水を含ませておき、筆先に濃墨をつけるようにします。



「7」樹木の下部分を描きます。



8

「8」この部分には、筆先を割った状態で描き始めます。



9

「9」白さを表現したい部分は、筆で水を置いてティッシュで吸いとり、墨が落ちます。



10

「10」よく乾かしてから霧を吹きます。



11



12

「11・12」刷毛の片ぼかして暗い霧におおわれた背景を表現します。



ポイント

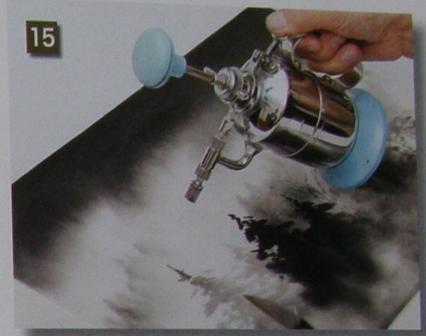
膠を使った部分は完全に乾きにくいので、  
フィキサチーフで墨を止めてから表具に出すようにしましょう。



完成

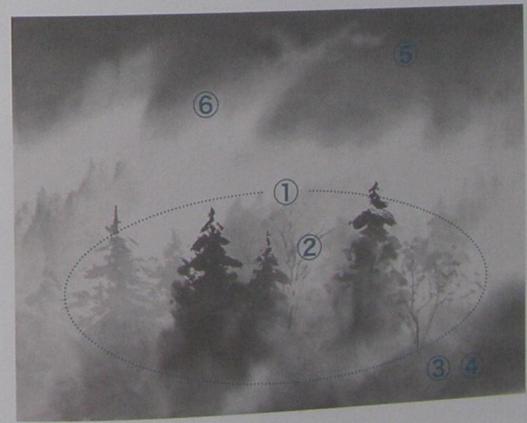
「幽玄」(32.7×44.0cm)

「13・14」霧の表情を表現していきます。  
霧の中の木立も描き入れます。



「15〜17」再び霧を吹いて濡らし、ティッシュや刷毛でまとめていきます。

### 作画の手順



- ① 樹木を手前から奥に、濃淡の変化を出して描いていく。(三墨)
- ↓
- ② 枝は「ひげ描き」で表情をつける。
- ↓
- ③ 濃墨に膠を混ぜて樹木の前景を描く。
- ↓
- ④ 水を含ませたティッシュで墨を吸いとり霧を表現する。
- ↓
- ⑤ 濃墨に膠を混ぜて刷毛で雲におおわれた背景を描く。
- ↓
- ⑥ ④と同様に墨をとって、漂う霧を表現する。

収穫

「ドーサ」を使った描き方

たわわに実る稲穂をドーサ液を含ませた筆に墨をつけて描きます。稲穂の質感が表現できることも、美しい墨色も生まれてきます。



「1」ここでは、水の代わりにドーサ液を筆に含ませます。



「2」その穂先の片側に濃墨を付けていきます。



「3」「4」「5」稲穂の描き方を繰り返します。この時、筆に付ながら、筆路の変化をつけて描くようにします。



「6・7」葉を描きます。葉は葉の基本形を応用するつもりで描くようにします。この後、完全に乾かします。

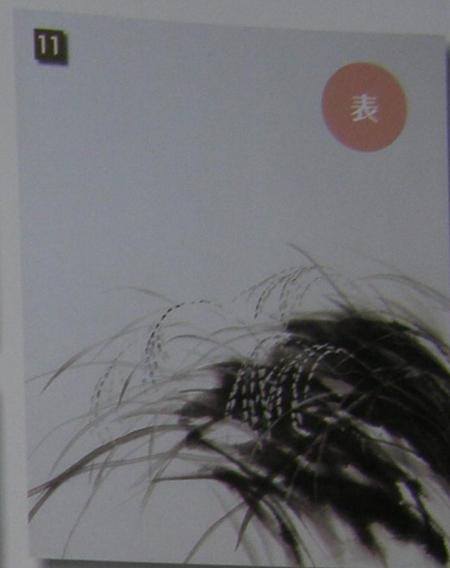


「9・10」裏返して稲穂の部分に濃墨で染めると、稲穂が白く浮き立ちます。

「00」同様に葉を描き進め、このかひ



「15〜17」稲穂にたわむれる二羽の雀を描き入れて完成です。



表

「11〜14」表に返して淡墨で整え、中景を描きます。



## 作画の手順

① 水の代わりにドーサ液を筆に含ませ、穂先の片面に濃墨をつける。



② その筆で稲穂を表現する。



③ 同じ筆で葉を描き入れる。



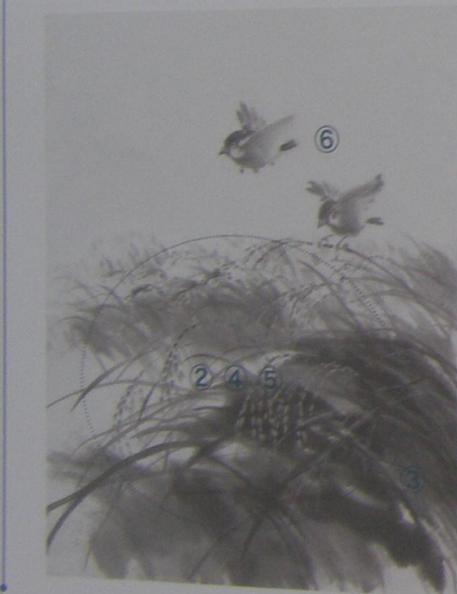
④ 用紙を裏返して、稲穂の部分を裏から濃墨で染める。



⑤ 表に返して淡墨で全体を整える。



⑥ 雀を描き入れる。



完成



「收穫」(34.0×27.8cm)

参考作例「清流」(35.0×24.5cm)  
ドーサを水がわりに調墨して樹木を描きました。



月と星

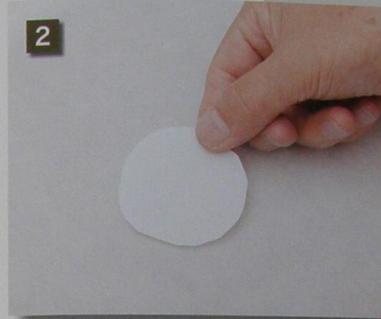
「ドーサと膠」を使って描く

ここでは、ドーサと膠を併用して、その特性を生かした描法を解説しましょう。この描法も様々な応用がききますので、是非習得して下さい。



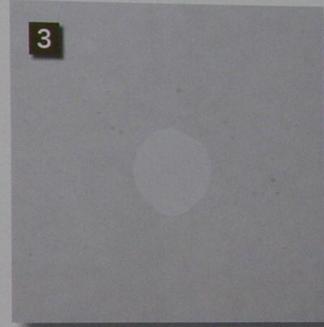
1

「1」ドーサ液と膠水を用意します。この作品ではドーサ液で星を、膠水で月を表現します。



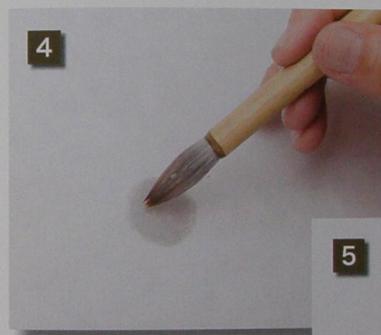
2

「2」月の形に切った紙を用紙の上に置きます。



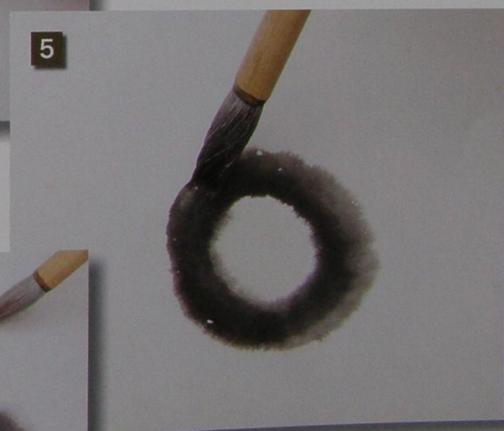
3

「3」まず、この月の周囲に星を表現するためにドーサ液を散らしておきます。



4

「4」紙をとって、膠水をたらすようにして月を描きます。



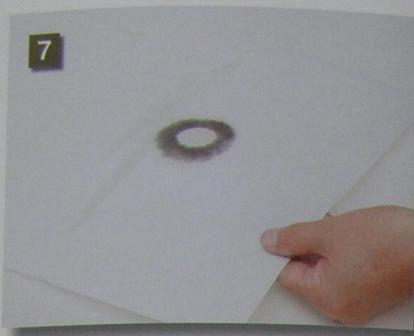
5

「5」月の輪郭にそって墨を入れます。



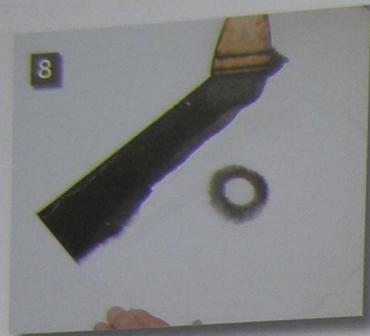
6

「6」月の上に、月に照らされた雲を膠水で描き入れます。

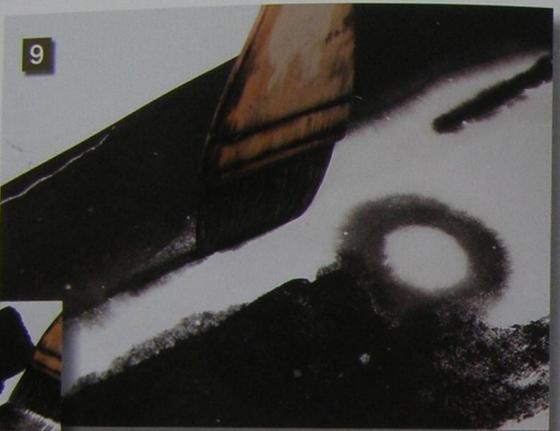


7

「7」この紙を裏返します。



8



9

「8」「10」月と雲の部分を残しながら、全体に濃墨を塗ります。



10



11

「11」再び表に戻します。



12

「12」濃墨で形の崩れた月の形は、水を落とせば元通りに円くなります。



参考作例1「十五夜シアター」(48.5x40.5cm)

「月と星」(28.6x36.0cm)



## 作画の手順

①月の形に切った紙を用紙の上に置く。(マスキング)



②ドーサ液を散らす。(星の表現)



③膠水で月の形を描く。



④月の周囲を濃墨で染める。



⑤雲も膠水で描いておく。



⑥裏返して、裏から濃墨で月と雲の部分を残して染める。



⑦月や雲の部分に墨がにじみ込んでしまったら、表に戻して水をさせば、墨をはじいて形を整えられる。





参考作例 1 「十五夜シアター」 (48.5×40.5cm)



参考作例 2 「天の川をいただく森」 (48.5×41.7cm)



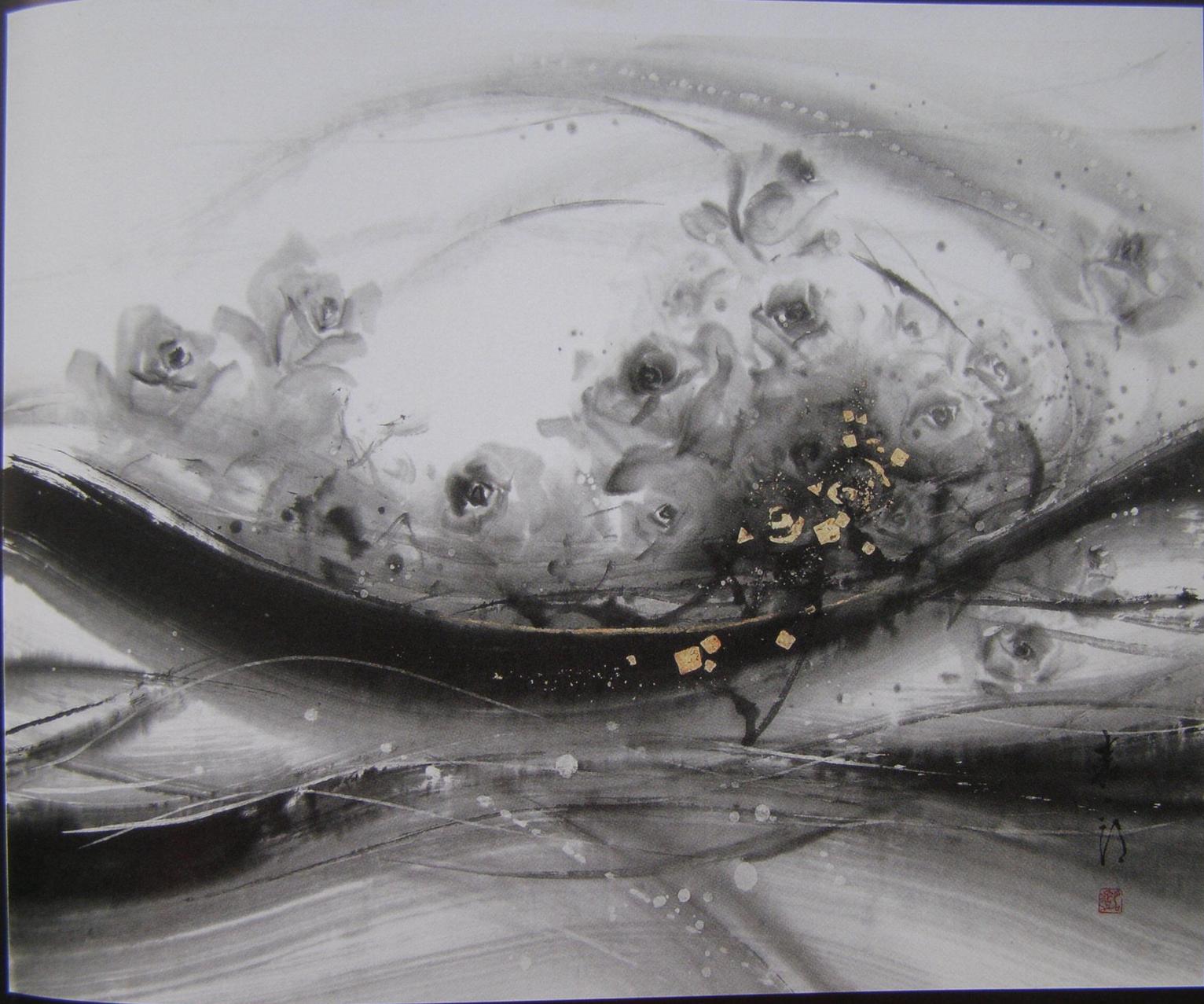
「炎」(スタンピング、膠 / 100.0×62.5cm)



「WALL・鳩」(スタンピング / 90.9×72.7cm)



「WALL・アンコールワット」(スタンピング / 90.9×72.7cm)



「バラシンフォニー」(ドーサ、金箔 / 72.7×90.9cm)



「WALL・バラ」(ドーサ、スタンピング / 50.0×72.7cm)



参考作例1「山荘」(44.6×33.0cm)

## 構図について

ここでは、スケッチや写真から自分のイメージにあった構図の作り方を考えてみましょう。

旅先などで出会った風景を作品に仕上げるために、まず必要となるのがスケッチですが、そのスケッチをもとに、省略や合成・変形を繰り返して、単なる「樹林に囲まれた山荘」から「山道を登りつめたところにある山荘」というイメージを作り上げてみました。つまり、現実にはない線や面を加えていくことによって、現存しない自分だけの世界が生まれてくるのです。そして、この場合は画面の下へ下へと合成が加えられているわけですが、左右、または上方に構図を広げていってもよく、最初に設定した構図から自分の求める構図にだんだん近づけることができます。





参考作例 1 「山莊」(44.6×33.0cm)

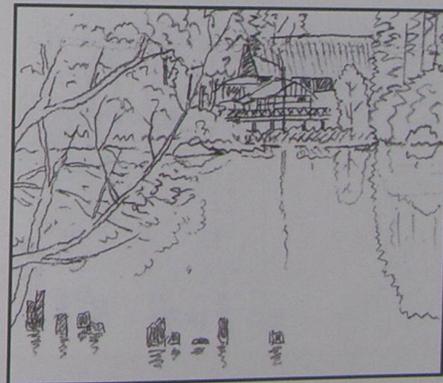
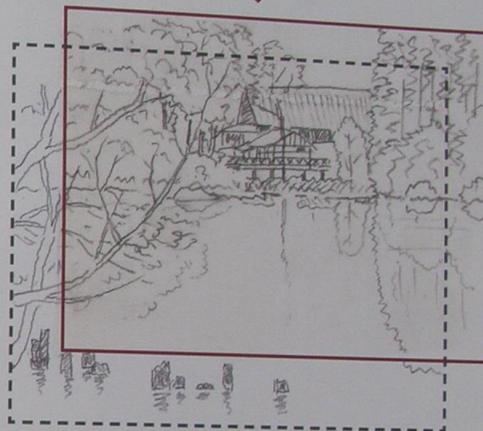


参考作例 2 「沼畔」 (32.0×41.8cm)

①



②



沼畔の休憩所の写真をもとに、構図を考えてみました。  
 まず、第一段階として、近景を加えて沼面を広げてみました(①)。しかしこれでは、水面がほぼ中央にきてしまい、単調なので②のように近景をさらに広げて沼面を大きくとることにしました(手前に杭を数本加えました)。奥行きを強調した構図となりました。



参考作例 2 「沼畔」 (32.0×41.8cm)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。

すみ び まな すい ぼく が  
墨の美に学ぶ水墨画  
き そ そう さく  
基礎から創作まで

●定価はカバーに表示してあります

2011年11月15日 初版発行

著者 ね ぎ し か い ち ろ う  
根岸 嘉一郎  
発行者 川内 長成  
発行所 株式会社日貿出版社

東京都千代田区猿樂町1-2-2 日貿ビル内 〒101-0064  
電話 営業・総務(03)3295-8411／編集(03)3295-8414  
FAX (03)3295-8416  
振替 00180-3-18495

印刷・製本 株式会社 加藤文明社

撮影 小山幸彦

本文・カバーデザイン 荒川 桃子

©2011 by Kaichiro Negishi / Printed in Japan

ISBN978-4-8170-3887-6 <http://www.nichibou.co.jp/>

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。



ISBN978-4-8170-3887-6

C0071 ¥2500E



定価 本体 2,500円 +税

